

科学論の社会理論的検討

N・ルーマンの機能分化論を手がかりに

筑波大学 川山竜二

1 目的

この報告の目的は、N・ルーマンの社会理論のなかでもとりわけ機能分化論を用いて、社会理論が科学論をいかに構成しうるかを考察する。

2 方法

本報告では、一方でルーマンの社会の機能分化論に焦点をあて「科学論」の社会学的考察を展開し、他方ではU・ベックの「再帰的近代」における科学についての考察やW・レペニースによる「社会学と科学論(科学社会学)」の考察を手がかりとして、社会理論のなかの科学論を考察する。

3 結果

機能分化論から「科学論」を眺めてみると、科学論は科学システムの自己反省であるといえる。他方で「科学論」は、現代社会においてひとつの専門分野 *Disziplin* になっているともいえる。これは社会のひとつの機構として「(自己反省という機能システムとしての/科学システムのシステム分化としての) 科学論」が働いていることを示している。またリスク社会(論)で主題となるのは「科学」である。そこで論じられるのは「単純な科学」から「再帰的な科学」への変化であり、社会的な文脈のなかで「科学論」の可能性が読み込まれることになる。語弊を恐れずに言えば「科学論の社会(学)化」である。その帰結として現代社会において科学論の社会学的検討は必要性が生じてくる。そこで注意すべきなのは、「科学の観察」という科学論的営為に対する議論と科学論的営為が社会において、もしくは科学システムにおいてどのような意義をもっているのかという議論を区別しておかなければならない点である。

4 結論

ルーマンの機能分化社会論に立脚すれば、以下の点に着目できる。すなわち社会は機能的に分化しており、科学はその機能システムの一つである。社会の機能システムとしての科学は、その内に自らを科学的対象とする「科学論」という営みがある。だが、科学システムもそのなかにある「科学論」も社会の一部であると捉えることができる。したがって、「科学論」の基礎づけを「社会(学)理論」に求める可能性を秘めている。さらに科学論の社会理論的検討は、「社会学の社会学」にも新たな地平を拓けるのではないだろうか。

文献

- Luhmann, N., 1990, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag. =2009, 徳安彰訳『社会の科学 (1)(2)』法政大学出版局。
- Beck, U., 1986, *RISKOGESELLSCHAFT: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag. =1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。
- Lepenies, W., 1989, *Gefährliche Wahlverwandtschaften. Essays zur Wissenschaftsgeschichte*, Philipp Reclam.